沖縄県立埋蔵文化財センター企画展

発掘調査速報展 2010

開催期間：平成 22 年 7 月 21 日（水）
～ 8 月 22 日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター

もくじ

ごあいさつ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
平成 21 年度調査実施箇所 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
中城御殿跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
首里城跡「御内原北地区」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
宮国元島上方古墓群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
普天間古集落遺跡ほか ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
大保川上流域の生産遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
松崎馬場跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
円覚寺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
沿岸地域遺跡分布調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
白保竿根田原洞穴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
基地内文化財分布調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
発掘調査のきっかけ（契機）とは ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
平成 22 年度発掘調査等予定一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

凡例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センターの企画展「発掘調査速報展 2010」を補完するものとして編集した。
2. 許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

沖縄県内には貝塚、グスク、集落跡や近世古墓群など約 2,500 箇所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人が残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄の歴史・文化の研究に役立てています。

通常、発掘調査開始から出土品を整理し報告書を刊行するまで数年を要することから、前年度の発掘調査で得られた最新の情報をいち早く公開するため、「発掘調査速報展」を毎年開催しております。

今回の「発掘調査速報展 2010」では、平成 21 年度に調査を行った沖縄本島・離島を含む 8 地区の遺跡発掘調査と 2 地区の遺跡分布調査の概要と主な成果について、出土遺物や写真パネル等で紹介しております。

かつて、琉球国王の世子の邸宅であった中城御殿跡の発掘調査からは、中国・本土産陶磁器をはじめヨーロッパ産陶器も出土し、往時の暮らしぶりがうかがえます。また、新石垣空港建設に伴う「白保竿根田原洞穴」の調査では、出土した頭骨片が約 2 万年前の後期更新世に位置づけられることがわかりました。人骨そのものから直接年代が得られたのは、静岡県の浜北人骨に次ぐ二例目の発見です。現在資料整理中のため本企画展での展示はございませんが、今後の公開をご期待ください。

この速報展を通じて、多くの方々が当センターの発掘調査と沖縄県の埋蔵文化財について親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める機会となれば幸いです。

平成 22 年 7 月 21 日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所 長　　守内　泰三

平成 21 年度調査実施箇所

沖縄本島

大保川上流域

基地内文化財
分布調査

普天間古集落遺跡ほか

中城御殿跡

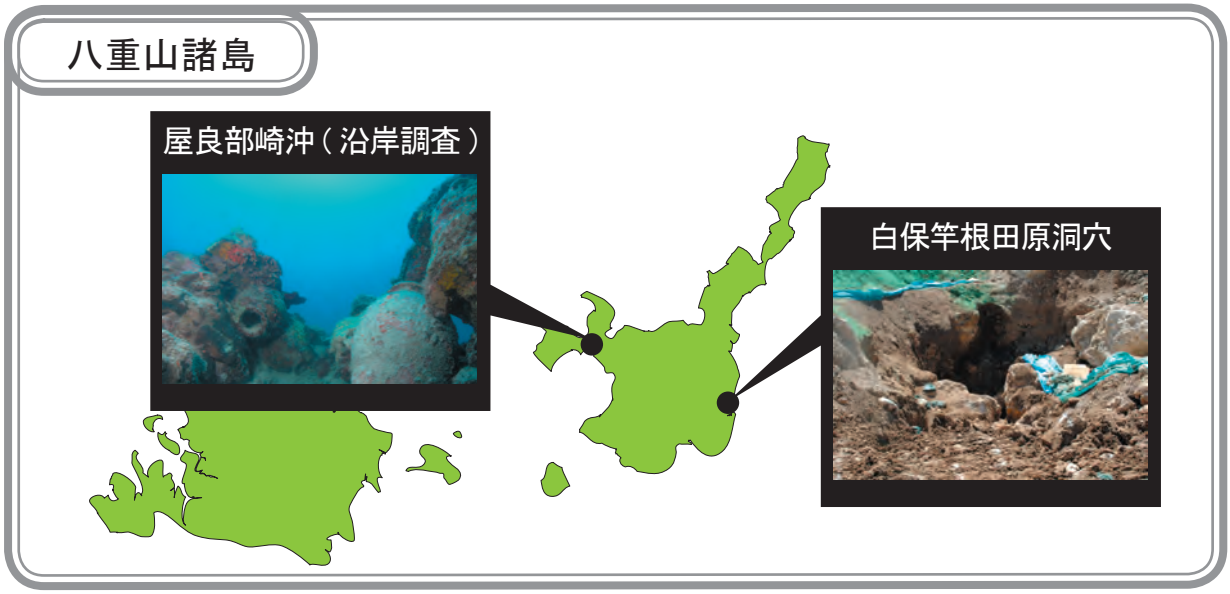
円覚寺跡

松崎馬場跡

首里城跡「御内原北」

久米島

真謝沖（沿岸調査）



平成 21 年度発掘調査一覧

事業名	所在地	時代区分
首里城公園（旧中城御殿跡）発掘調査	那覇市首里大中町 1 丁目 1 番地	近世・近代
首里城跡（御内原エリア）発掘調査	那覇市首里当蔵町 3 丁目 1 番	グスク時代～近代
宮国元島上方古墓群発掘調査	宮古島市上野字宮国カムザマ	近世～近現代
海軍病院建設予定地内発掘調査	宜野湾市普天間	縄文時代、グスク時代、近世～近代
大保川上流域の生産遺跡発掘調査	大宜味村	近代
松崎馬場跡試掘調査	那覇市首里当蔵町 1 丁目 4 番	グスク時代～近代
円覚寺跡発掘調査	那覇市首里当蔵町 2 丁目 1 番	グスク時代～近代
白保竿根田原洞穴総合発掘調査	石垣市盛山	後期更新世～近世
沿岸地域遺跡分布調査	久米島、八重山諸島	グスク時代～近世・近代
基地内文化財分布調査	宜野湾市（普天間飛行場内）	縄文時代（？）、グスク時代～近代

中城御殿跡（なかぐすくうどぅんあと）

事 業 名 ：県営首里城公園整備事業に伴う発掘調査

所 在 地 ：那覇市首里大中町１丁目１番地

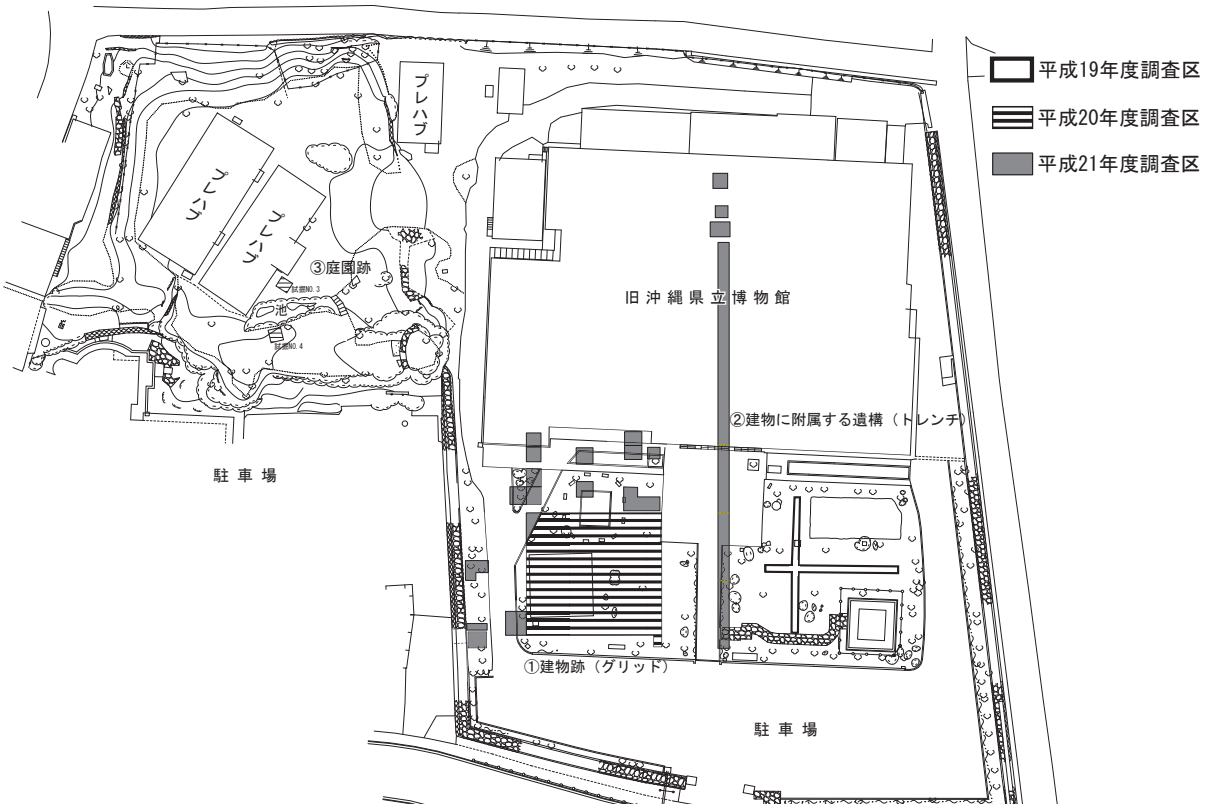
時　　代：近世・近代

調査期間：2009（H21）年６月２日～2009（H21）年 10 月 30 日

調査内容：　琉球国王の世子（せいし）の邸宅である中城御殿は、1870（明治６年）年の移転から沖縄戦で焼失するまでこの場所に存在しました。戦後は首里市役所を経て旧県立博物館が建ちますが、この発掘調査は旧県立博物館移転後の跡地利用計画に先立つ遺構の範囲確認調査として、平成 19 年度より継続して行われています。

平成 21 年度は博物館建物があった区域でも調査を行い、石畳や側溝を検出しました。また近世・近代の沖縄産・中国産・本土産の陶磁器をはじめ、ヨーロッパ産の陶器、石製の小皿、鍍金（と）された飾り金具や様々な色のビーズといった貴重な遺物も出土しました。また 21 年度は中城御殿よりさらに古い時代の遺構（円形石組遺構）が検出され、近世の遺構も残されていることが確認されました。

近代の尚家や近世の士族の暮らしぶりを知る上で重要な遺跡です。今年度も発掘調査を進めていくとともに、報告書作成に向けて平成 20・21 年度に出土した遺構・遺物の整理・分析作業を進めています。



年度ごとの調査箇所

作業風景

本土産染付出土状況

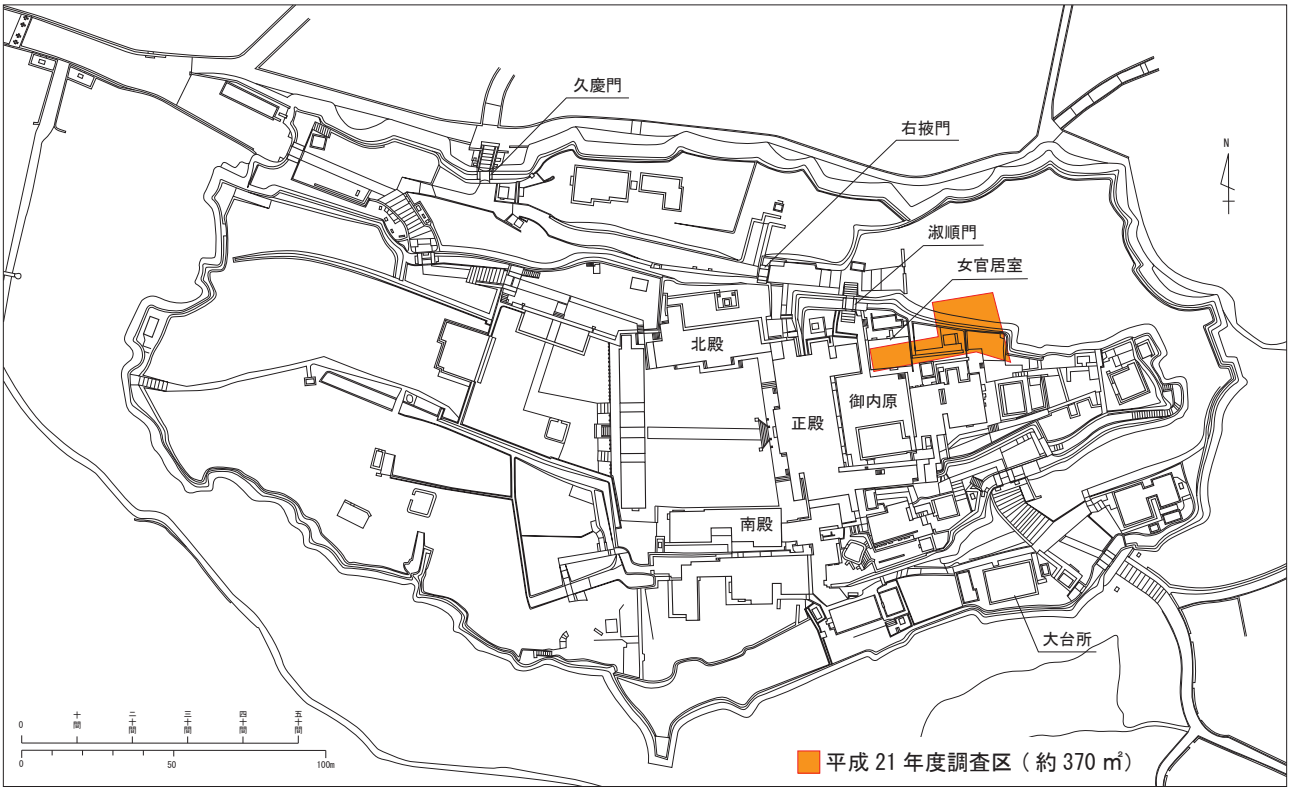
円形石組遺構　　底は固く填圧されている

調査区遠景

首里城跡（うーちばるきたち く）「御内原北地区」

事 業 名 ：首里城跡（御内原エリア）発掘調査
所 在 地 ：那覇市首里当蔵町３丁目１番
時　　代：グスク時代～近代
調査期間：2009（H 21）年９月 14 日～ 2010（H 22）年３月 26 日
調査内容：　平成 21（2009）年度の首里城跡発掘調査は、正殿裏手の北東付近において約 370 ㎡実施しました。調査区一帯は御内原（うーちばる）と呼ばれ、国王やその親族、国王に仕える女官らが生活した場所です。その中でも今回調査した地点には、かつて女官居室（にょかんきょしつ）の一角及び、そこから連なる通路などが敷設されていました。これらの創建及び撤去時期は不明ですが、大正から昭和にかけて行われた開発や戦災により、大きく改変を受けることになります。このような状況でも、14 世紀後半～ 17 世紀前半にかけての７時期に区分できる数種の遺構が検出されました。

　出土遺物は中国、タイ、ベトナム、朝鮮などのほか、肥前、薩摩を産地とする多彩な陶磁器類のほか、金属製品や自然遺物も豊富に得られており、今後、首里城御内原の造営法や生活を復元する上で参考になるものと思われます。



平成 21 年度調査区

調査区遠景（東から）

調査状況

時期区分別層序・遺構・遺物の概要一覧（首里城跡御内原北地区）

時代区分・年代		土層					主な遺構	主な遺物	備考
区分	年代	層序	性格・分布（グリッド）	色　調	土質・状況	層　厚（cm）			
第７期	17 世紀前半	A- 3 ～ A- 7 層	第５期築造石組み遺構を埋めた造成土。石組み遺構内部上層と周辺に分布（D・E－9・10）	褐色、灰色、褐色、黒色等	密な赤色土、コーラル、クチャ、褐色土、木炭等が規則的に堆積	120 ～ 180	石組み遺構	中国産白磁、染付、肥前産陶磁器、沖縄産陶器、銭貨、金属製品、自然遺物	
第６期	16 世紀後半～ 17 世紀初頭	A- 9・10 層	第５期築造石組み遺構内下層部堆積土で、南西角から投棄された遺物包含層。石組み遺構内部下層（D－9・10）	暗褐色、褐色等	褐色土、礫、灰色土等が混在して堆積	25 ～ 50	石組み遺構	中国産青磁、白磁、染付、肥前産陶器、瓦質土器、金属製品、自然遺物	
第５期	15 世紀後半～ 16 世紀中葉	B- 3 ～ 9、C- 2 ～ 10 層	第４期遺構を埋める形で大規模に投入された造成土で広範に分布（F・G- 2 ～ 8、D ～ F- 9・10）	黄褐色、褐色、灰色、褐色、黒色等	密な赤色土、礫、灰色土等が不規則に投入され、表面はコーラルによる舗装	140 ～	造成土、舗装面、石積み、石組み遺構	中国産青磁、白磁、染付、色絵、褐釉陶器、ベトナム産陶磁器、タイ産褐釉陶器、銭貨、金属製品、自然遺物	
第４期	15 世紀後半	3 層下部	第３期火災後に築造したと思われる遺構・舗装面（F・G- 1・2）	黄褐色	コーラル舗装か	20	石積み、石列	中国産青磁、黒釉陶器、褐釉陶器、銭貨、鉄釘、銅製品、自然遺物	
第３期	15 世紀中葉	4 層	基壇・礎石建物跡（D ～ F- 1・2）	赤色の造成土上に淡黄色コーラルの舗装（被熱部は橙色）	密な赤色土上にコーラル舗装	－	礎石、基壇（被熱）	中国産青磁、白磁、褐釉陶器、金属製品	平成 11・19 年度検出遺構とつながる建物跡
第２期	14 世紀後半～ 15 世紀前半	－	内郭内面石積み・造成土（D- 7 ～ 10）	造成土は赤色で裏込めは不明。	密な赤色土	－	石積み	なし	平成 11・19 年度検出石積み間の遺物から年代をあてた
第１期	14 世紀後半～ 15 世紀前半	－	現内郭石積み以前の城壁か（D- 7）	－	－	－	石積み	なし	平成 19 年度検出石積み 2 につながる可能性あり

関連年表

1392（洪武 25）年	中山王察度、数丈の高楼を建造し以て遊観に備うという。
1453（景泰 4）年	志魯・布里の乱起こり、満城火起こり府庫焚焼す。
1458（天順 2）年	万国津梁の鐘を鋳造し、正殿に掛着すという。
1459（天順 3）年	尚泰久王、本国王府失火して倉庫、銅銭、貨物延焼す、と中国皇帝に報告する。
1477（成化 13）～ 1526（嘉靖 5）年	尚真王代に北外郭部分が拡張される。
1609（万暦 37）年	薩摩に侵攻される。
1616（万暦 44）年	薩摩から朝鮮陶工 3 人が来琉し、窯業を伝える。
1660（永暦 14）年	9 月 27 日子の時、倏然として火を失し、王城宮殿を焼き尽くし、王、大美殿へ移居すという。
1671（康熙 10）年	2 月 14 日再建。
1709（康熙 41）年	11 月 18 日、尚益王即位。20 日丑時（午前 1 ～ 3 時）に至り、国殿及び南北諸殿、尽く焼燼に遭う、という。
1712（康熙 51）年	再建。
1879（明治 12）年	廃藩置県により首里城は明け渡され、熊本鎮台沖縄分遣隊の宿舎として使用される。
1924（大正 13）年	沖縄神社の社務所として女官居室跡地に世誇殿を移築する。
1945（昭和 20）年	沖縄戦により首里城集中砲火を浴び灰燼に帰す。

宮国元島上方古墓群（みやぐにもとじまじょうほうこぼぐん）

事 業 名 ：宮国元島上方古墓群発掘調査

所 在 地 ：宮古島市上野字宮国カムザマ

時　　代 ：近世～近現代（主に近現代）

調査期間：2009（H21）年 10 月 13 日～ 2009（H21）年 12 月 13 日

調査内容：　宮国元島上方古墓群は、宮古島市上野字宮国に所在する近世から近代にかけての墓域です。今回の調査は県道工事に伴う記録保存調査で、平成19年度から調査を行っています。平成 21 年度は 10 月から 12 月の２ヶ月間実施しました。

宮国集落の東側は崖面と台地上に墓があります。21 年度は台地上にある２ヶ所の墓を中心に調査を行い、崖側を 20 号墓、集落寄りを 21 号墓としました。２ヶ所とも墓の移転はすんでおり、墓の持ち主を特定できる遺物はわずかでした。

宮国元島上方古墓群の特徴には、墓の入り口（正面）に石積みを設けて墓室を地表より低くするという点があり、20・21 号墓も同じような構造をしています。

20 号墓は石灰岩の岩盤にあいた縦穴を墓にしています。遺物は沖縄製の陶器と宮古島製の土器、日本製の陶磁器といった焼き物が中心です。貨幣が数点出土しており、中には「大清銅幣（たいしんどうへい）」という中国の清朝（しんちょう）末期（20 世紀初め）の貨幣があります。これは県内で出土した例がなく、なぜ宮古島にもたらされたのか興味深い点があります。

21 号墓は小山状になっている石灰岩の岩盤の横穴を利用した墓で、墓室の広さは10㎡近くあり、古墓群の中でも規模の大きいものです。墓室奥の一段高い場所に四肢骨（しこつ）や頭骨が集められていました。21 号墓は 20 号墓に比べ近代の遺物が中心で、最近まで使っていた可能性があります。墓外の西側には遺物が集められていて、21 号墓と、ここからみつかった破片どうしがくっつくことから、われた壺などを墓の移転の際に捨てた場所だったのでしょう。

台地上でも調査を行い、こぶし大から人頭大の石灰岩を集めた集石遺構３ヶ所を確認しました。遺構からは土器や陶器が数点出土しています。しかし、ここに人が住んだという情報はなく、畑にするにしても表面の土が薄いため、どのような性格の遺構か分かりません。また、調査区の外には６m四方の大きな石積み遺構がありました。

崖側の一部の墓は昨年度で調査を終えることができなかったため、今年度も調査を行いました。墓に伴う（墓として使われた）時期の遺物かわかりませんが、無土器期（約２千～１千年前）のシャコガイ製斧、イモガイ製ビーズが出土しました。

その他にも用途不明の貝製品、骨製品が出土しました。

宮古島ではグスク時代から近世（近代）の墓の調査が進められています。宮国の調査とこれらの調査をあわせて考えることで、宮古島における墓の変化のようすが分かるのではないかと思います。

20 号墓

21 号墓

普天間古集落遺跡ほか

事 業 名 ：海軍病院建設予定地内発掘調査

所 在 地 ：宜野湾市普天間

時　　代 ：縄文時代、グスク時代、近世～近代

調査期間：2009（H21）年7月28日～2010（H22）年3月12日

調査内容：　キャンプ瑞慶覧内にて、普天間古集落遺跡、普天間石川原遺跡、普天間下原遺跡及び普天間後原遺跡の調査を行いました。

調査の結果、縄文時代、グスク時代及び近世～近代の遺構・遺物が検出されました。

縄文時代のものとして、竪穴遺構及び土坑、土器及び石器を確認しました。竪穴遺構は、3.8m × 2.4 mの大きさのもので、遺構内の土から土器や石器が出土しました。土器は、縄文時代晩期のものが多く出土しています。

グスク時代のものは、ピット（小さな穴）を多く確認していますが、用途は分かっていません。遺物は、グスク土器、白磁、カムィヤキ、土器などを確認しています。

近世～近代のものは、調査区全体から遺構及び遺物を多く確認しています。遺構では、屋敷跡、溝及び石敷遺構などの集落に関連するものが多く、今後、整理していくと集落の区画が分かる可能性があります。遺物は、沖縄産陶器及び本土産陶磁器が多く、中国産陶磁器などが少数出土しています。

獣骨検出状況

沖縄産陶器・壷 検出状況

竪穴遺構　完掘状況

石組遺構　床面検出状況

大保川上流域の生産遺跡

事 業 名 ：大保川上流域の生産遺跡発掘調査

所 在 地 ：大宜味村

時　　代：近代

調査期間：2009（H21）年 10 月１日～ 2010（H22）年２月 28 日

調査内容：　本事業は大宜味村教育委員会が主体となり、当埋蔵文化財センターの指導のもとで実施した発掘調査です。大保ダムの建設に伴い実施した分布調査により、大保川上流域からは多数の生産遺跡が確認されました。平成 20 年度は炭焼窯７基を対象に発掘調査を実施しましたが、平成 21 年度はこれまで発掘調査の事例がなかった「エキス窯（染料を煮出すための窯）」と考えられる窯の発掘調査を実施しました。この窯は平成 20 年度時点では樟脳等を生産する「蒸留窯」の可能性が考えられましたが、今年度の詳細な発掘調査によって、車輪梅や山桃等から染料を煮出すための窯である可能性が高いことがわかりました。

３つ並んだ焚口、６つの窯穴、１つの煙突によって構成されており、大規模で丁寧に構築された窯であることがわかりました。また、周囲は山の斜面を切り出して広い平坦面を設けてあることから、炭焼窯とは比較にならない大規模な作業を行っていたことがうかがえます。

２ヶ年間に及ぶ発掘調査によって、近代大宜味村における知られざる「山の生業」の一端が明らかとなりました。

窯（全景）

煙突出口

煙突

煙道

出土遺物・本土産近現代磁器

出土遺物・ロストル（鉄製品）

松崎馬場跡（まつざきばばあと）

事 業 名 ：松崎馬場跡試掘調査

所 在 地 ：那覇市首里当蔵町１丁目４番

時　　代：グスク時代～近代

調査期間：2009（H 21）年 11 月４日～ 2009（H 21）年 12 月４日

調査内容：　松崎馬場跡は沖縄県立芸術大学と龍潭（りゅうたん）との間にある広場でかつては西海道（さいかいどう）の一部として使われていました。また冊封使らを接待する際に龍潭でハーリー競漕が行われ、それを観覧するための席や茶屋がつくられていました。現在は空き地となり、隣接して国学・孔子廟（こうしびょう）の南側とを区切っていた石積みを見ることができます。

試掘調査はかつての松崎馬場を横断する形で東西方向に１箇所、南北方向に３箇所、さらに後世の攪乱（かくらん）を受けて地表面から一部露頭している範囲の遺構検出を行いました。

主な成果としては龍潭側（南側）に道路跡、そして国学・孔子廟跡側（北側）から松崎馬場の整地層が検出されました。

道路跡は、路面となる範囲は石灰岩を細かく砕いて粉状にした微砂層（びさそう）で埋められていて、かなり堅く締まっており、丁寧に加工された縁石が設けられていることが判明しました。この微砂層直下の造成層から 15 世紀の中国産陶磁器と銭貨が出土しています。これらのことから当該道路跡は松崎馬場内を通っていた中頭方西海道（なかがみほう）の一部である可能性が考えられます。

松崎馬場の整地層は３枚確認されました。最も新しい整地層はサンゴ礫を薄く敷いた近代で、その直下に 1801 年に松崎馬場を整備した際の整地層が検出されました。次にその下層からサンゴ礫（れき）が厚く堆積した床面が検出され、出土遺物から近世前半頃まで遡（さかのぼ）るものと思われます。更に、最下層からの出土遺物で松崎馬場跡一帯が土地利用され始めた時期は 15 世紀代であることを確認しました。これらのことから松崎馬場跡はグスク時代から近代まで何度も改修を行っていたことがわかりました。

発掘前状況

道路跡（南から）

全景（西から）

全景（東から）

円覚寺跡（えんかくじあと）

事 業 名 ：円覚寺跡発掘調査

所 在 地 ：那覇市首里当蔵町２丁目１番

時　　代：グスク時代～近代

調査期間：2009（H 21）年７月１日～ 2009（H 21）年９月９日

調査内容：　平成 21 年度に実施した円覚寺跡発掘調査は山門（さんもん）北側区域一帯において、前年度調査で検出した石積み遺構の全容を明らかにするために行いました。今回の調査では創建当初とその後の近世にかけての地下造成に関係する遺構を確認することができました。石積みは全部で６基確認することができ、16 世紀から 18 世紀の間につくられたものであることがわかりました。造成方法としては東西方向に伸びる石積みの面側に土を入れ、更にその外側に自然石を密に詰め入れ、最後に石積みで石、土留めを行うといった複雑な造成事業を行っていることが判明しました。また石積みはお互いに複雑に切り合っていたことから、山門北側周辺は何度も改修が行われたことが明らかになりました。

　また排水用の石造り溝も検出されました。この溝から流れてくる排水は西端の集石遺構へ伝い、地下に浸透していく構造になっていることが確認できました。集石遺構へ流れ込んだ廃水は最終的に地下で地山を伝った後、西側に隣接する放生池（ほうじょうち）へ集水されていったものと想定されます。石造りの排水用溝は近世期につくられたことが確認されましたが、この集石遺構は円覚寺創建（1494 年）当初にまで遡る可能性があります。このことから地下へ浸透させる排水方法は 15 世紀末から近代までの長期間、機能していたことが考えられます。

調査区全景（東から）

調査区遠景（北から）

石造り溝

発掘作業状況

石積み遺構

沿岸地域遺跡分布調査

事 業 名 ：沿岸地域遺跡分布調査

所 在 地 ：久米島、八重山諸島

時　代　：グスク時代～近世・近代

調査期間：2009（H21）年7月1日～2010（H22）年3月31日

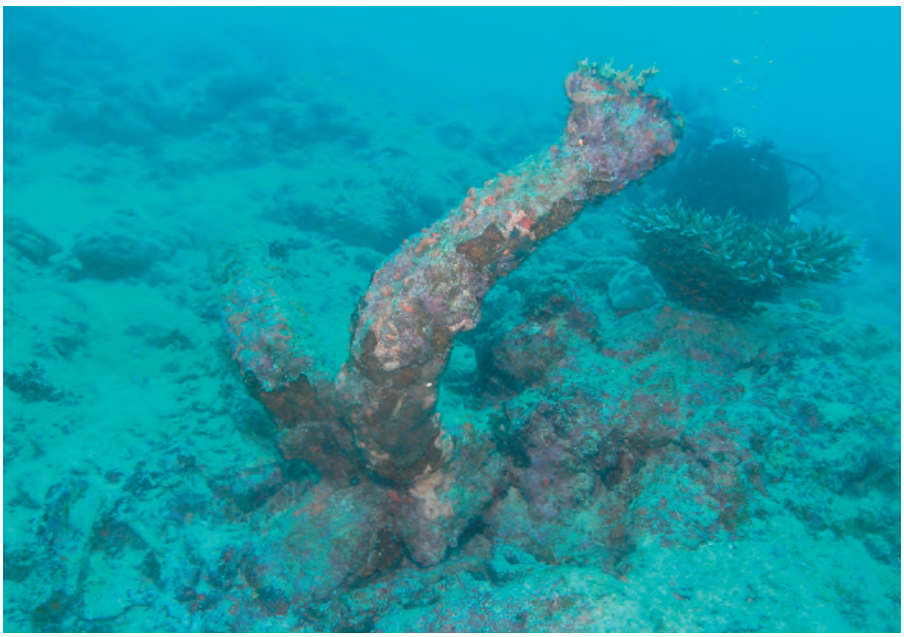
調査内容：　沿岸地域遺跡分布調査は沖縄県の沿岸地域に所在する埋蔵文化財の分布状況を把握するために実施しています。過去４年にわたる調査の結果、貿易船等の船舶の海難事故に関係すると考えられる遺跡や、石切場跡、塩田跡、魚垣等の生産遺跡、古港の現状等が確認できました。平成21年度は八重山諸島・久米島を中心に調査を実施しました。

その結果、石垣島屋良部崎沖では巨大な鉄製四爪アンカーが５本、沖縄産陶器壺が密集して珊瑚に覆われる状況で確認できました。この海域で巨大な船舶が沈没したか積み荷が投棄された可能性があります。または、港として利用された結果、多数の鉄製アンカーが散乱しているのかもしれません。

久米島では「正保国絵図」に記載された古港である真謝沖の海底で木造船が確認されました。周辺に時代を示すような遺物が確認されなかったため、時代や国籍等の詳細は不明ですが、今後さらに調査を進めてその性格を明らかにする必要があります。

年度末にはこれまでの成果概要をまとめ、遺跡地図を作成し、「沿岸地域遺跡分布調査（Ⅲ）～概要・遺跡地図編～」を刊行しました。

遺物散布状況（沖縄産陶器・壷）
～屋良部崎沖～



2 号アンカー　～屋良部崎沖～

真謝港の景観　～真謝沖～

調査風景～真謝沖～

白保竿根田原洞穴（しらほさおねたばるどうけつ）

事 業 名 ：白保竿根田原洞穴総合発掘調査

所 在 地 ：石垣市盛山

時　　代：後期更新世～近世

調査期間：2009（H21）年９月１日～ 2010（H22）年３月 31 日

調査内容：　本事業は新石垣空港建設に伴って実施しています。これまで化石が産出する「C１洞穴」として知られていましたが、沖縄県教育庁文化課によって実施された再調査により、遺跡であることが認識され、「白保竿根田原洞穴周辺遺物散布地」として周知の遺跡となりました。

これまで、沖縄鍾乳洞協会理事長の山内平三郎氏らの調査によって、洞穴内から人骨・脊椎動物遺体・貝類遺体・下田原（しもたばる）式土器・石器等が確認されていました。

これらの資料のうち、人骨の放射性炭素年代測定を行った結果、３点がそれぞれ約２万年前、１万８千年前、１万５千年前と非常に古く、後期更新世（こうしんせい）（旧石器時代）に位置づけられることがわかりました。これまで人骨から直接年代が得られた事例は静岡県の浜北人骨（約１万４千年前）だけでしたが、日本国内では今回が２例目の発見となり、国内最古の事例となります。また、沖縄県ではこれまで人工遺物を伴う明確な旧石器時代遺跡は確認されていませんでしたが、今回の発見で石垣島には確実に２万年前から人が生息していたことが明らかとなり、当該時期の人工遺物も今後発見される可能性は極めて高くなりました。

平成２２年度は本格的な発掘調査を実施します。その後の研究によって、沖縄県における後期更新世の様相がさらに明らかになることでしょう。

白保竿根田原洞穴周辺の景観

化石ホール遠景（北から）

化石ホール東壁

2号人骨（20,416 ± 113BP）

4号人骨（18,752 ± 100BP）

基地内文化財分布調査

事 業 名 ：基地内文化財分布調査

所 在 地 ：宜野湾市（普天間飛行場内）

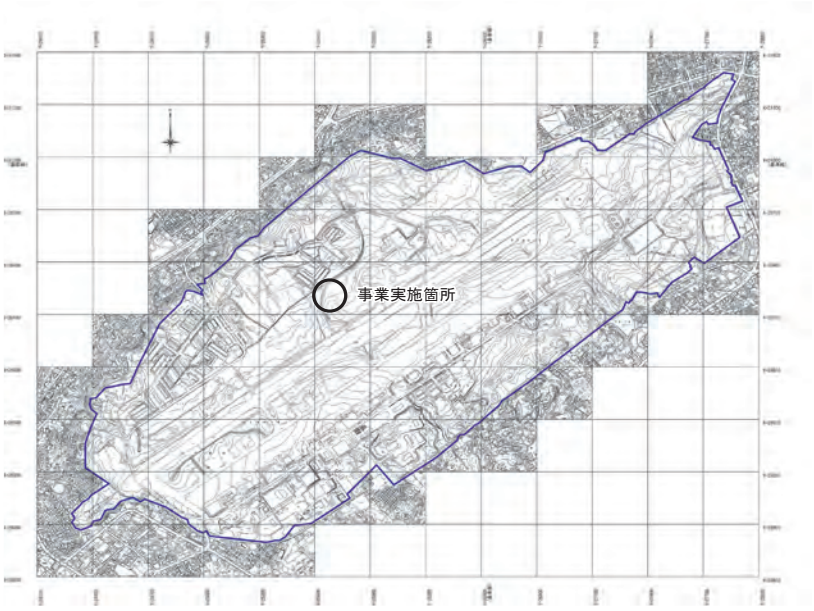
時　　代：縄文時代（？）、グスク時代～近代

調査期間：2009（H21）年 11 月 25 日～ 2010（H22）年2月 19 日

調査内容：　この調査は、沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地内にある埋蔵文化財（遺跡）の分布状況を把握することを目的とし、平成９年度から文化庁の補助を受けて実施しています。

13 年目となる平成 21 年度は、平成 20 年度に引き続き大山加当原（おおやまからろーばる）第四遺跡の確認調査を実施する計画となっていましたが、立入手続き等の関係で開始が遅れたため、表面踏査や確認調査箇所の選定等を行うにとどめ、発掘作業は平成 22 年度以降に持ち越す事にしました。なお、大山加当原第四遺跡は、過去の調査でグスク時代～近代の頃の畑跡と縄文土器を含む堆積層が発見された遺跡です。

一方、平成 21 年５月には宜野湾市教育委員会と共同で「普天間飛行場内文化財調査検討会」を立ち上げ、翌年３月には検討結果をまとめた『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』を刊行しました。これによって普天間飛行場における遺跡の状況がある程度見えてきましたが、まだ多くの課題が残されています。今後とも宜野湾市教育委員会と協力しながら、検討を重ね、より詳細な遺跡地図作成をめざしていきます。



平成 21 年度事業実施箇所

普天間飛行場内及び周辺の遺跡

発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的な手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的にしています。

発掘調査は、大きく「学術調査」と「行政調査」のふたつに分けることができます。

「学術調査」とは、大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査で、学術的な目的意識（研究テーマ）を持って取り組まれます。

一方、「行政調査」とは、行政機関（教育委員会など）がおこなう発掘調査で、その契機や原因によって大きく３つに分けることができます。

まず、遺跡（埋蔵文化財）の適切な保護を目的とし、その所在・内容等を把握するための調査があります。

次に、保存・活用のための発掘調査があります。重要な遺跡の評価を行うための調査や、史跡指定された遺跡の整備・活用のために行われる調査も含まれます。

最後に、記録保存のための調査があります。この調査は、開発側との調整によって、現地保存ができなくなった遺跡について、開発に先立ち発掘調査をおこなうものです。この調査によって得られた記録類は、消滅した遺跡に代わって、遺跡の内容を後世に伝えるものとなります。

このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりがありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないわけですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては以下にお問い合わせください

〇沖縄県立埋蔵文化財センター　調査班　TEL 098-835-8752

〇沖縄県教育庁文化課　記念物班　TEL 098-866-2731

平成22年度発掘調査等予定一覧

遺 跡 名・調 査 名	調査目的・原因	調査予定時期
県内遺跡詳細分布調査	県内各地域の埋蔵文化財分布調査と基礎資料作り	6月～7月
喜田盛遺跡発掘調査	県道改良工事に伴う発掘調査	7月
国指定史跡円覚寺跡発掘調査	史跡整備に伴う遺構確認調査	7月～8月
白保竿根田原洞穴総合発掘調査	新石垣空港建設に伴う発掘調査	8月～10月
基地内文化財分布調査	基地内に所在する遺跡の把握	10月～2月
首里城公園（中城御殿跡）発掘調査	県営首里城公園整備に伴う発掘調査	8月～12月
首里城跡発掘調査	国営首里城公園整備に伴う発掘調査	9月～1月
海軍病院建設予定地内発掘調査	米軍施設建設工事に伴う発掘調査	8月～3月
宮国元島上方古墓群発掘調査	県道改修工事に伴う発掘調査	9月
戦争遺跡詳細分布調査	重要な戦争遺跡の詳細な遺構確認調査	随時

平成 22 年度企画展
「発掘調査速報展 2010」

2010（平成 22）年 7 月 21 日

編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
住所　沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
電話　098-835-8751
FAX　098-835-8754

ご案内

第 38 回文化講座

「発掘調査速報 2010 その 1」

7 月 24 日（土）13：30 ～ 16：15（13：00 開場）

①中城御殿跡　②円覚寺跡
③松崎馬場跡　④首里城跡（御内原北地区）

第 39 回文化講座

「発掘調査速報 2010 その 2」

8 月 14 日（土）13：30 ～ 16：15（13：00 開場）

①大保川上流域の生産遺跡　②普天間古集落ほか
③宮国元島上方古墓群　④基地内文化財分布調査

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室　**先着 140 名・入場無料**

移動展　発掘調査速報展 2010

期間：平成 22 年 9 月 4 日（土）～ 9 月 19 日（日）

開催場所：**今帰仁村歴史文化センター 談話室**

第 40 回文化講座

「山に残された歴史　～発掘されたやんばるの生業（なりわい）～」

9 月 4 日（土）13：30 ～ 16：30（13：00 開場）

講師：片桐千亜紀（県立埋蔵文化財センター）
安座間 充（金武町教育委員会）
崎原 恒寿（恩納村教育委員会）
幸喜 淳（海洋博公園管理財団）

会場：今帰仁村歴史文化センター 講堂　**先着 100 名・入場無料**